

易往無人章（二帖第七通）

しずかにおもんみれば、それ、人間界の生を受くることは、まこと
に五戒をたもてる功力によりてなり。これおおきにまれなること
ぞかし、ただし人界の生はわずかに一旦の浮生なり。後生は
永生の樂果なり、たといまた采華にほこり、采耀にあまるとい
うも、盛者必衰、会者定離のならないなれば、ひさしくたもつべきにあ
らず、ただ五十年百年のあいだのことなり、それも老少不定とき
くときは、まことにもつたのみすくなし、これによりて今の時の
衆生は、他力の信心をえて、浄土の往生をとげんとおもふべきな
り、そもそも、その信心をとらんずるには、さらに智慧もいら
ず、才学もいらず、富貴も貧窮もいらず、善人も悪人もいらず。

男子も女人もいらず、ただもろもろの雑行をすてて、正行に歸するをもって本意とす、その正行に歸するといふは、なにのようもなく、弥陀如来を一心一向にたのみたてまつる理ばかりなり、かように信ずる衆生を、あまねく光明のなかに攝取して、捨てたまわずして、一期の命尽きぬれば、かならず浄土におくうたまふなり、この一念の安心一つにて、浄土に往生することの、あらゆるもいらぬとりやすの安心や、されば、安心という二字をば、やすきところとよめるはこのところなり、さらになにの造作もなく、一心一向に如来をたのみまいる、信心ひとつにて、極樂に往生すべし、あらゆるえやすの安心や、また、あらゆるやすの浄土や、これによりて大經には、易往而無人とこれを説かれたり、この文のころは、安心をとりて弥陀を一 hướng にたのめば、浄土

へはまいうやすけれども、^{しんじんの}信心をとるひとまれなれば、^{じょうど}浄土へは往
まやすくして人なしといえるは、この^{きょうもん}經文のころなり、かくのごと
くころうるうえには、^{ちゅうやちようぼ}昼夜朝暮にとなうるところの^{みょうごう}名号は、
^{だいひぐせいごおんのほう}大悲弘誓の御恩を、報じたてまつるべきばかりなり、かえすがえす
^{ぶっぼう}仏法にころをとどめて、とりやすき^{しんじんの}信心のおもむきを^{ぞんじ}存知して、
かならず^{こんど}今度の^{いちだいじ}一大事の^{ほうど}報土の^{おうじょう}往生を、とどべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

文明六年三月三日これを清書す

易往無人章の大意

人間に生まれることは五戒をたもった功德によるのであり、まことにまれなことです。しかし、人生は短くはかないもので、たとえ栄華をばこっても、盛者必衰会者定離のならいで久しく続くものではなく、しかも老少不定なのですから、人の世はあてにはなりません。ですから私たちは他力の信心を得て、浄土往生を願うべきなのです。

その信心を得るには、智慧も学識も必要ではなく、貧富や善悪や男女といった違いも一切関係なく、ただ自力のはからいを捨て、二心なく阿弥陀如来をたのむばかりです。み仏はこのように信じるものを光明の中におさめとって、命が終わればかならず

浄土に生まれさせてくださるのです。この信心一つで浄土に往生することのたやすさから、「安心」というのです。『大經』の「易往而無人」というのは、信心を得れば浄土に往生するのは易しいが、信心を得る人がまれであるから、浄土には行きやすいが人がいないということです。

このように信心のいわれを心得た後に私たちが称える念仏はすべて、本願のはたらきによってお救いくださるご恩を報じるものです。仏法をよく聞いて、なんのはからいもない信心のいわれを知り、浄土往生をとげるよう心がけなさい。